

人を納得させる文章には、具体性があります。細かいことまで、丁寧に書くことで、いきいきとした文章となります。今回は、通信や新聞を書く上で重要な具体的記述について、まとめていただきました。

「会話文の肉声を大切に」

2、3年前の学校通信、学級通信、学校新聞などをまとめて読む機会があった。実にたのしい記事があった。先生や子どもたちの姿が目につかぶ記事もあった。これだけの通信を創る先生の苦勞は大変だろうと察しながら読んだ。

ある学級通信に、母親がインフルエンザで倒れたため、家事を手伝い、カレーを作った、という児童の日記がのっていた。「手伝ってくれて助かるよ」というお母さんの言葉が書かれていた。

「会話のある日記が多くなってうれしいな！」という先生の感想もあった。同感だ。通信・新聞には、会話文の肉声が多ければ多いほどいいと思う。

べつの学級通信には、「安売りの魚を買って大喜びのお母さん」の姿をつづった作文がのっていた。母親のナマの姿があった。

同じ通信だが、小さな蛇をつかまえて教室に連れてきた子の話が写真入りででていた。

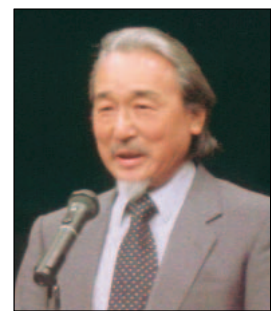
記事も写真も実によかった。

でも、問題の蛇はどんな色と模様だったのか、蛇をめぐって、具体的にはどんな会話があったのか、結局はどこかに逃がしてやったのか、そこまで読みたかったなど思った。なものねだりだろうか。

通信、新聞にはむろん先生の意見、訓話も大切だが、読んだのは、その日その日、学校や家庭で起こったことを丁寧に書いた記事だ。

たとえば、落ち葉の清掃をする子どもたちの話が学級新聞にあった。それを読んでもしかし、具体的な姿が浮かんでこなかった。

現場の事情を知らずにものをいうのは気がひけるが、清掃しながら、落ちたばかりの葉のみずみずしさに打たれ、「落葉凶鑑」を創ろうという子がいるかもしれない。落ち葉の写生をする子がいるかもしれない。掃き寄せた落ち葉をどうするかという議論があるかもしれない。ゴミとして捨てるのか。燃やすのか。冬に備え、花壇にまいてやるのか。堆肥にするのか。どの方法が環境をよくすることに貢献するのか。



●たつの・かずお
朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。

そういう議論があったとすれば、記事もいきいきとしてくるはずだ。

新聞、通信で大切なのは、現場だ。現場には、教師や子や親の「肉声」がたくさんある。それを細密に、具体的に記録し、まとめ、紙面にだす。「たのしかったです」「よかったです」という言葉だけではなくて、もう一歩、踏み込んだホンの言葉がもつと紙面をにぎわしていれば、と思った。

作家、向田邦子さんは「神は細部に宿りたまう」ことを説き、どんな小さなことでもいい、毎日なにかしら発見をし、「へえ、なるほどなあ」と感心をし、面白がること、それが大切なのだと言っていた。先生にも子どもにも、学校の内外には、それぞれが体験する「小さな発見」の驚きがたくさんあるはずだ。それを紙面で読みたい。